

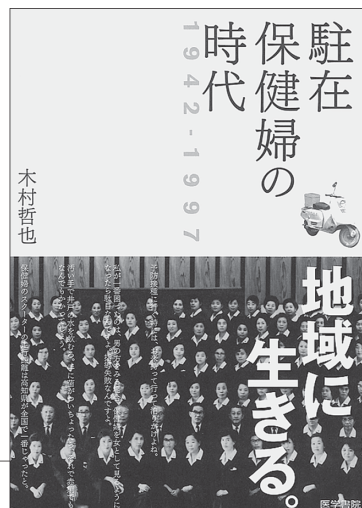
駐在保健婦の足跡， その語りに保健師活動の 原点あり

新しい視座による保健師歴史研究書の誕生

評者◎名原壽子 三育学院大学看護学部

駐在保健婦の時代 1942-1997 木村哲也(著)

定価 2940 円(本体 2800 円+税 5%) / 医学書院(Tel : 03-3817-5657)



本の命は帯に示される。本書の帯に「地域に生きる。」「地域を丸ごと支えた人たちの姿が蘇る！ 若き歴史・民俗学者による圧倒的なオーラルヒストリー。」とある。かつて、本誌第56巻第13号(2000年12月号)に森田ゆり氏が「保健婦という、日本が世界に誇れるコミュニティー・スペシャリスト」と表現し、「日本の保健婦の世界的にもユニークな役割」について言及したように、本書は、住民に寄り添い、地域丸ごとを支えることを使命とする保健師の役割、仕事を、感動とともに、心に沁みて感じ取れる書である。また、「聞き書き」の手法で時代の特徴を切り取って綴ってある点でも、保健師に関する歴史書のなかできわめてユニークな位置づけになると言える。

著者は、高知県の駐在保健婦であった祖母への聞き取りを発端に保健師の歴史研究に着手し、学士、修士、博士論文と研究を積み重ねた。さらに研究を深め、その集大成として近代日本の公衆衛生政策の変遷、最後の第8章に保健婦駐在制廃止をめぐる動向を加えてまとめたのが本書である。新進気鋭の歴史・民俗学者として保健師の歴史研究に民俗学的視点から新しい風を送り込んでいることは、本誌連載「『保健婦雑誌』に見る戦後史」の読者はすでにご存知のことと思う。

本書は、保健婦活動の一形態である保健婦駐在制を題材に、日本の公衆衛生の戦時・戦後史を、その実質的な担い手であった保健婦に焦点をあててまと

めたものである。著者は本書のねらいを①医療・公衆衛生史の再構築、②総力戦体制・戦後改革研究、③地域研究の3点とし、それぞれ、新たな「主体の設定」「時間の設定」「空間の設定」と、新しい歴史研究の方向性を提示している。③における地域どうしの関係として、高知・青森・沖縄の比較研究がされていることが興味深い。

また、本書の眼目は、現代史研究の新たな動向として、戦時／戦後を連続して把握しようとする視座にあり、これは、先人のあゆみに公衆衛生看護の本質をくみとる保健師の専門性論議に不可欠の観点であり、同感するところである。

本書に取り上げられているのは、主として、1942(昭和17)年の制度実施から1997(平成9)年の制度廃止までの駐在保健婦の活動と、それを取り巻く社会と生活であり、当時の世相を描写している民俗学者の視点は鋭い。

本書の圧巻は、聞き書きの手法による当時の駐在保健婦の方言そのままの「語り」である。そこには、戦前から現在に至る歴史の流れのなかで培われてきた保健婦魂そのものがある。著者の保健師に対する限らない共感と愛着に満ちた細やかな意図を反映している日本の保健師の歴史書としてこれまでにない貴重な本である。多くの保健師に一読を勧めたい。